



## —第1回日本歯科衛生教育学会の報告—

平成22年12月10日(金)、11日(土)京都にて、第1回日本歯科衛生教育学会(平成22年度歯科衛生士専任教員秋期学術研修会と併記)が開催され、全国114校243名の教員が参加した。

本学院は昨年度、県下で初めて3年課程の卒業生を輩出した節目をむかえ、さらなる発展のために、演者として参加し、学生教育についての成果を報告したので、その要旨を以下に記す。

また、今回の調査にあたっては、より詳細を把握するために、多数の調査項目を設け実施したが、ご多用にも関わらず、卒業生の就職地や臨床実習施設など本県歯科医師会会員諸先生から回答を賜り発表することができた。この場を借りて専任教員一同、関係諸氏に深く感謝の意を示す。

発表要旨 「本学院における実習指導強化の取り組みについて」

～3年制教育課程学生の卒後臨床評価の報告～

### 【緒言】

本学院は昭和39年に1年制教育としてスタートし、その後昭和53年に2年制教育へ、さらに平成19年度に3年制教育へ移行し平成21年度3月に3年課程教育初の卒業生49名を輩出した。3年制移行に伴い全国の養成校では独自性のある教育が展開されている。本学院でも社会のニーズを反映し、思考することができる歯科衛生士の育成を重視し、以下の教育目標を掲げている。

- 1 基礎的医学知識の充実
- 2 隣接医学教育の強化
- 3 障がい者および高齢者歯科教育の充実
- 4 予防歯科教育の充実
- 5 摂食嚥下・口腔ケアの知識と実技の修得
- 6 臨床・臨地実習場との連携強化
- 7 医療面接と接遇マナーの徹底指導
- 8 継続管理に伴うIT教育の充実

このようななか、21年度の求人件数倍率、給与平均値の上昇などからみても、本県の3年課程を修了した卒業生への期待度が大きいと推測できた。そこで、実際に2年課程と3年課程を比較して、臨床現場では3年課程の卒業生はどのように評価されているのか、学生教育に対し特に何を求めているのか、また、本学院で3年制移行に伴い強化した取り組み(表1)についての効果の有無を知るために調査したので報告する。

### 【対象と方法】

対象1は平成21年度卒業生の就職地45件、対象2は平成19～22年度臨床(地)実習場36件、対象3は平成21年度卒業生49名とし、各々の回答率は順に75.6%、88.9%、83.7%であった。

▼表 1：3年制移行にともない強化した取り組み（具体例を一部紹介する）

A	<p><b>実習指導補助員の配置</b></p> <p>学院内実習にて、実務経験のある歯科衛生士に協力依頼し少人数制教育を徹底</p> <p><b>口腔保健センター専属指導歯科衛生士からの個別指導</b></p> <p>障がい者歯科診療にて、口腔清掃に重点をおいた知識と実技指導を実務経験のある歯科衛生士に協力依頼し個別指導を徹底</p>
B	<p><b>特別講義・特別実習</b></p> <p>対象者別歯科保健指導、摂食嚥下障がいに関する他職種との連携、Hys への対応、SRP、特定保健用食品の効用、レセコン操作、食品メーカーとろみ食の紹介など</p>
C	<p><b>実技確認試験</b></p> <p>フロッシング、PMTC、印象採得、口腔内洗浄、セメント練和など</p>
D	<p><b>学生合同発表会・演習</b></p> <p>最新歯科医学分野、矯正、口腔外科、筋機能療法、顎関節症、睡眠時無呼吸症候群 全身疾患と口腔の関連、精神保健、保健福祉センター実習反省会など</p>
E	<p><b>訪問保健指導法・介護技術法・摂食機能訓練法の講義、実習</b></p> <p>PT, OT, ST との連携、呼吸リハビリテーション、VF, VE 体験、 摂食嚥下の評価と訓練法、車イス操作、姿勢の確保、口腔ケアなど</p>
F	<p><b>臨床(地)実習</b></p> <p>実習時間 700 時間を 900 時間へ延長、本学院作成実習指導マニュアルの活用、 実習指導担当歯科衛生士合同研修会・打合せ会・反省会</p>

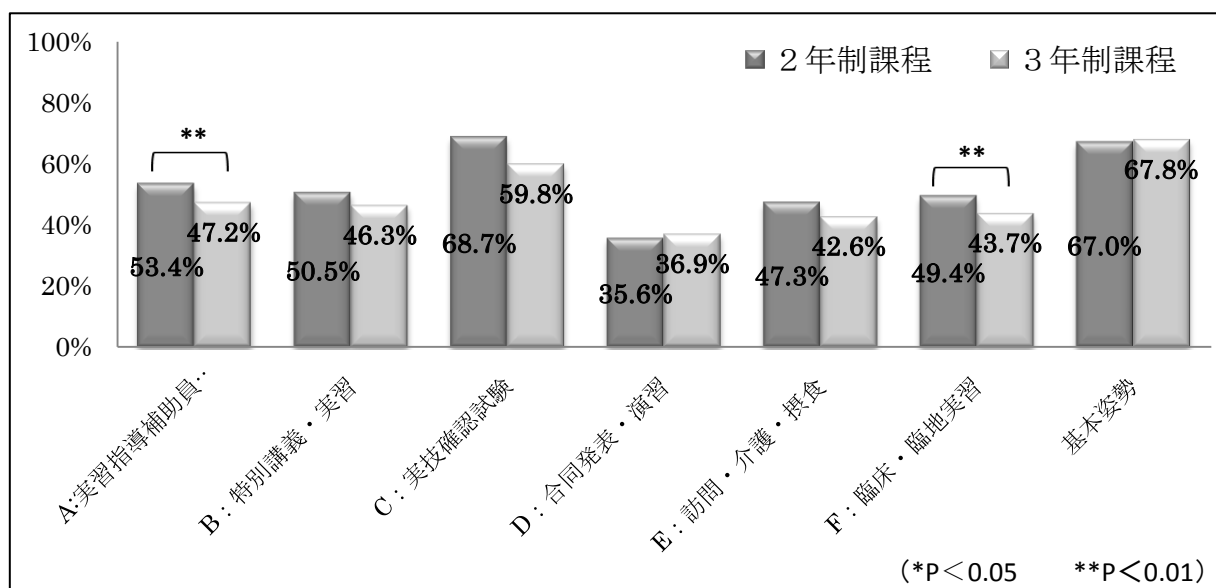
調査方法は、いずれも無記名方式の質問紙調査とし、対象 1, 2 に対しては表 1 に関連する「歯科衛生士の業務 6 7 項目」と、「業務に対する基本姿勢 8 項目」を使用した。評価方法は項目ごとに、5：良くできている、4：できている、3：どちらともいえない、2：あまりできていない、1：できていない、の 5 段階選択回答形式とし、2 年課程と 3 年課程の比較検討を行った。さらに、3 年制になり「特に期待し指示をしている項目」についても歯科衛生士の業務 6 7 項目からの選択回答形式とし調査した。

対象 3 に対しては、上記同様の歯科衛生士

の業務 6 7 項目から「習得不足を感じた」、「卒直後実施できた」、「卒直後実施できたと思う項目において表 1 の中で特に役立った学院での取り組み」の 3 項目について選択回答形式にて調査した。

集計方法は、対象 1, 2 に対しては、「歯科衛生士の業務 6 7 項目」を表 1 の A~F の関連項目別に振り分け、「良くできている」と「できている」の回答数を達成率とし、2 年課程と 3 年課程で比較検討した。比較結果は  $\chi^2$  乗検定し、有意水準は  $P < 0.05$  とした。また、「特に期待し指示している項目」及び対象 3 のすべての調査項目について集計を行った。

▼図1：就職地「2年課程と3年課程の達成率比較結果」



【結果】

対象1. 就職地の調査結果

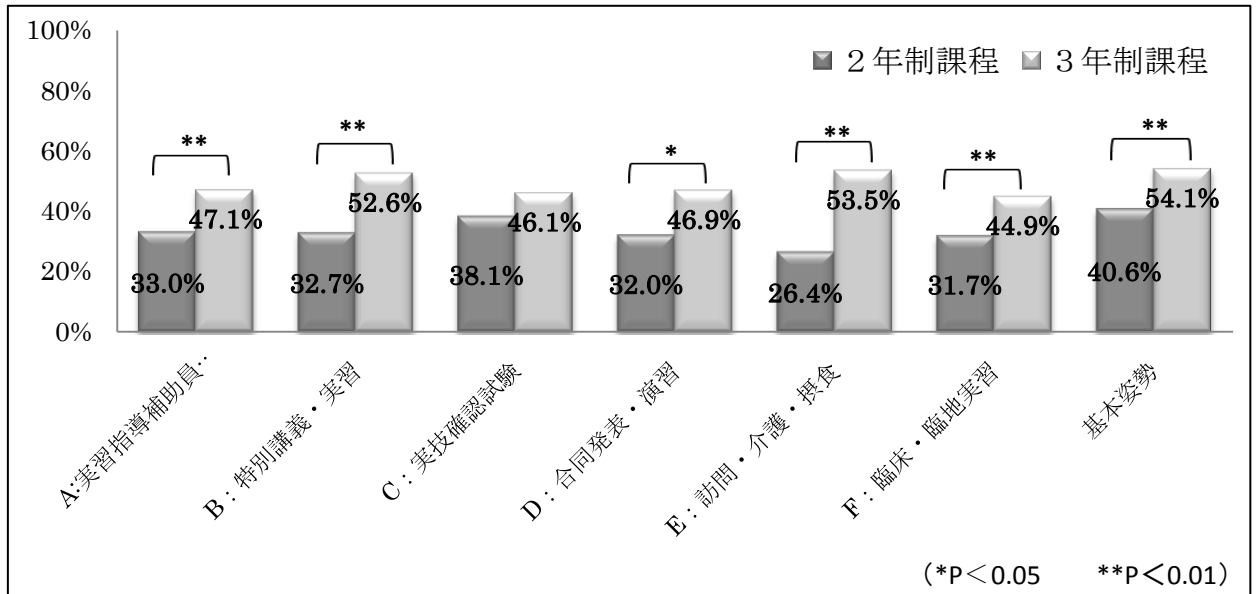
2年課程と3年課程の比較結果に有意差がみられたのは「A. 実習指導補助員・口腔保健センター専属指導歯科衛生士からの個別指導」と「F. 臨床(地)実習」の取り組みであった。これらの取り組みに関連する歯科衛生士業務の評価は3年課程のほうが低く、3年課程の達成率を基準にその比較差をみると、「A: 実習指導補助員・口腔保健センター専属指導歯科衛生士からの個別指導：-6.2%」、「F. 臨床(地)実習：-5.7%」であった(図1)。「特に期待し指示をしている」項目は、回答件数の多い順に「PMTC：17件」、「歯科衛生実地指導：16件」、「SRP：15件」、「歯科衛生判断、バキューム操作：各14件」、「印象採得、口腔内精密検査：各13件」となり、歯科予防処置、歯科診療補助の業務が上位を占める結果であった(表2)。

▼表2: 就職地

「特に期待し指示をしている」

就職地「指示している」	n=33(件)
PMTC	17
歯科衛生実地指導	16
SRP	15
歯科衛生判断	14
バキューム操作	14
印象採得	13
口腔内精密検査	13
妊産婦への対応	12
小児への対応	12
セメント練和	10
暫間被覆冠作製	10
口腔内写真撮影	10
レントゲン撮影の補助	10
患者誘導	10
業務記録作成	10
高齢者への対応	10

▼図2：臨床（地）実習場「2年課程と3年課程の達成率比較結果」



対象2. 臨床（地）実習場の調査結果

2年課程と3年課程の比較結果に有意差がみられたのは「C. 実技確認試験」を除く全ての取り組みであった。これらの取り組みに関連する歯科衛生士業務への評価は3年課程のほうが高く、達成率の比較差は、「A. 実習指導補助員・口腔保健センター専属指導歯科衛生士からの個別指導：+14.1%」、「B. 特別講義・特別実習：+19.9%」、「D. 学生合同発表会・演習：+14.9%」、「E. 訪問保健指導法・介護技術法・摂食機能訓練法の講義、実習：+27.1%」 「F. 臨床（地）実習：+13.2%」、「基本姿勢：+13.5%」であった（図2）。「特に期待し指示をしている」項目は、回答件数の多い順に「バキューム操作：10件」、「患者誘導：6件」「セメント練和：5件」、「印象採得：4件」、「感染予防、フッ化物歯面塗布、歯科衛生実地指導、小児への対応：各2件」となり、直接対面行為を除く、歯科診療補助の業務が上位を占める結果であった（表3）。

▼表3:臨床（地）実習場

「特に期待し指示をしている」

実習場「指示している」	n=32(件)
バキューム操作	10
患者誘導	6
セメント練和	5
印象採得	4
感染予防	2
フッ化物歯面塗布	2
歯科衛生実地指導	2
小児への対応	2

対象3. 卒業生の調査結果

「習得不足を感じた」項目は、回答人数の多い順に「歯科衛生判断：27人」、「レントゲン撮影の補助：26人」、「精密印象採得：24人」「SRP：22人」、「クラウン・ブリッジにおける診療補助、印象採得、コンピューター入力事務：各21人」、「暫間被覆冠作製、術前後

▼表4:卒業生

「習得不足を感じた項目」

習得不足を感じた項目	人数
歯科衛生判断	27
レントゲン撮影の補助	26
精密印象採得	24
SRP	22
クラウン・ブリッジにおける診療補助	21
印象採得	21
コンピューター入力事務	21
暫間被覆冠作製	20
術前・術後の説明	20
受付事務	19
高齢者への対応	19
医薬品の授与と服薬指導	18
情報収集	18
口腔内写真撮影	18
レセプト事務	16
修復物の試適・調整	16
口腔内精密検査	16
義歯の試適・調整・研磨	16
バキューム操作	15
小児への対応	14
インプラント手術の補助	13
妊産婦への対応	13

の説明：各 20 人」となり、臨床研修が必要な項目が上位を占める結果であった（表 4）。

「卒直後実施できた」項目は、「患者誘導：32 人」、「セメント練和：29 人」、「PMTC：28 人」、「感染予防：27 人」、「フッ化物歯面塗布、義歯の清掃・取扱い指導：各 25 人」、「セメント除去：24 人」、「歯科衛生実地指導、仮封材の取扱い：各 23 人」、「バキューム操作、表面

▼表5:卒業生

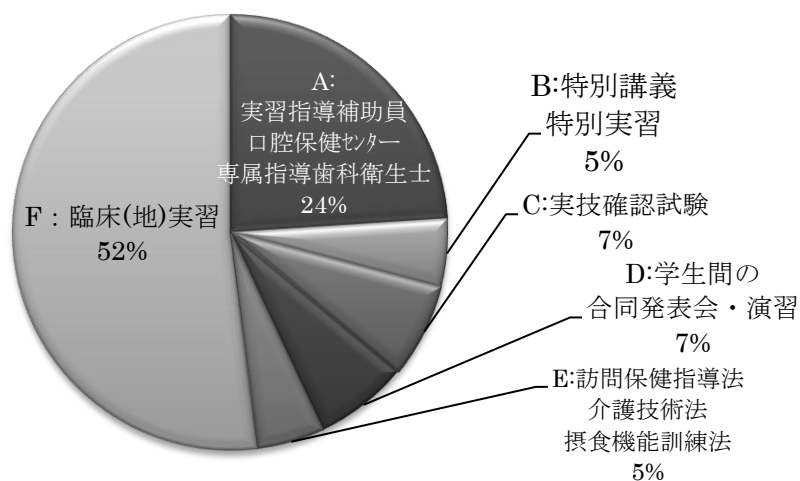
「卒直後実施できた項目」

卒直後実施できた項目	人数
患者誘導	32
セメント練和	29
PMTC	28
感染予防	27
フッ化物歯面塗布	25
義歯の清掃・取扱い等の指導	25
セメント除去	24
歯科衛生実地指導	23
仮封材の取扱い	23
バキューム操作	22
表面麻酔	22
口腔内精密検査	19
小児への対応	19
印象採得	18
高齢者への対応	17
SRP	14
小窩裂溝填塞	14
術前・術後の説明	14
情報収集	13
レントゲン撮影の補助	12
障がい者への対応	12
妊産婦への対応	12

麻酔：各 22 人」となり、臨床(地)実習場への調査内容「特に期待し指示をしている」の回答結果と重複する項目が多かった（表 5）。

「卒直後実施できたと思う項目において表 1 のなかで特に役立った取り組み」は「F. 臨床(地)実習：52%」「A. 実習指導補助員・口腔保健センター専属指導歯科衛生士からの個別指導：24%」であった。（図 3）

図3：卒業生「卒直後実施できた項目において役立った取り組み」



### 【考 察】

1. 就職地では教育年限が延長したことで、歯科診療補助業務において、即戦力につながると大きく期待していたことがうかがえる。さらなる実技向上のための取り組みの強化と指導者との教育の統一化を検討する必要がある。但し、回答において矛盾点も多く、現段階での経験を積んだ2年課程と3年課程を比較していると考えられる回答が目立った。より詳細な回答方法の明記が必要であり、今後の調査研究の課題としたい。

2. 臨床実習において学生が経験した業務については、就業後も生かされていることから、対面行為実習の増加が即戦力へつながると考えられる。今年度より実習ケース数の再導入を試み、目標数を実習指導担当歯科衛生士との打合せ会で決定したが、結果を集計し、目標値の改善を図り、指導のもとにおいて学生の対面行為実習の機会を増やしてもらえよう働きかける必要がある。ただし学生の資質差の見極めが必要になると考えられる。

3. 3年課程教育内容への認識と理解を求め歯科医療にかぎらず、チーム医療の中で専門性を生かし他職種と連携がとれる歯科衛生士の育成が重要であり、新たな活躍の場と、教育の場の確保が必要だと考えられる。

4. 臨地実習場である保健福祉センターでの3年課程の評価は総合的に高く、公衆歯科衛生活動の場に適した教育が生かされたと考えられる。

5. 卒業生が広い視野をもって業務に取り組むことが出来るように会立校という立場を活用し県下の歯科医療関係者へ3年制教育内容の情報提供を行うことが必要だと考えられる。今回の投稿がその一助になればと期待する。

(学院課 専任教員 野中友紀子)